



延世大学校
私にとって友愛とは

2025年版

公益財団法人 友 愛 編

延世大学校 小論文コンテスト（奨学金対象）

私にとって友愛とは 2025年版

∞ ∞ ∞ 目 次 ∞ ∞ ∞

友愛賞	이수진 Sujin Lee	…	1
第二位	정윤호 Yunho Jung	…	3
第三位	조한이 Hani Jo	…	5
第三位	グラナダ珠絵ル Granada Jewel	…	7
入 選	박선우 Seonwoo Park	…	9
入 選	김규한 Gyuhan Kim	…	1 1
参 加	박현수 Hyunsoo Park	…	1 3
参 加	천유진 Yujin Cheon	…	1 4
参 加	유하재 Hajae Yu	…	1 5
参 加	송유나 Yuna Song	…	1 7
参 加	佐藤智夏 Chinatsu Sato	…	1 8
参 加	임건태 Geontae Im	…	2 0
参 加	서주훈 Joohoon Seo	…	2 1
参 加	김윤구 Yoongu Kim	…	2 2
参 加	김동연 Dongyoun Kim	…	2 3
参 加	홍윤기 Yoonki Hong	…	2 4
参 加	조유빈 Yubin Cho	…	2 6

私にとって友愛とは

이수진 Sujin Lee

問題を共有し、解決の糸口をつくる鹿児島は、私にとって特別な記憶のある場所だ。中学生の頃、1か月間の交換留学で滞在したその町で、私は日本という国を教科書ではなく、人との出会いを通じて初めて知った。

あの学校の生徒たちは落ち着いていて親切で、お弁当のおかずを分けてくれたり、保健室まで一緒に歩いてくれたりした。それから10年が経ち、当時感じた“小さな親切”が今回の交流を通じて再び思い出された。大学生となって再び日本の友人たちと向き合ったとき、あの温かさが偶然ではなかったことに気づいた。

友愛財団との交流プログラムでは、「少子化」をテーマに討論した。驚いたのは、制度の違いを超えて、両国が非常によく似た悩みを抱えていたことだった。結婚を遅らせる理由、出産への負担、キャリア中断の不安、そして何より「未来が不確かである」という感覚。それは単なる人口問題ではなく、私たちが直面する不安定さそのものの反映だった。異なる国に住んでいても、同じ不安を感じているという事実が、私たちをすぐにつなげた。国籍ではなく「経験」が友愛を生むのだと、私は実感した。経済、労働、家族、コミュニティ。私たちが語り合ったすべてのテーマは、最終的に「持続可能か?」という問いに集約された。

こうした共通の不安を分かち合う中で、私は、友愛とは単なる「良い感情」ではなく、不確実な時代と共に生きるために倫理的な態度なのだと学んだ。私の経験があなたの語る現実と重なるとき、そこに連帯が生まれ、その連帯が解決への出発点となり得る。私は友愛を「共通の危機の前で互いを仲間として認め合う感情」と定義したい。今回の交流は、まさにそのような友愛の実験場だった。私たちは解決策を急ぐよりも、まず相手の状況を理解しようと努めた。それだけで、会話には真心が宿った。それこそが政策にはできない外交であり、市民による公共外交だと

私は信じている。

私はこの経験をこれからも忘れないだろう。10年前、鹿児島で感じた情緒が、時間と空間を超えてつながることを改めて確認した。そして、そのつながりを可能にする言葉こそ、「友愛」だった。互いを理解しようとする意志が続く限り、日韓両国はきっとより良い関係へ進むことができる。不確実な時代において、私たちが最も信頼すべき価値は「人と人の友愛」だと私は信じている。友愛が強まるほど、市民社会は成熟し、その上で眞の外交が可能となる。国家はときに沈黙し、外に向かないこともあるが、市民間の友愛は続いていける。そしてその友愛が外交の基盤となったとき、両国は本当の意味でつながるのだ。未来と共に生きる世代として、私たちは問題を共に解決できる関係を築いていかなければならない。私は、それを可能にする言葉こそ、「友愛」だと信じている。



私にとって友愛とは

정윤호 Yunho Jung

私にとっての友愛とは、異なる背景を持つ人々が偏見を捨て、相互理解を通じて真につながることだ。

私は韓国人の父と中国人の母のもとに生まれた多文化家庭の子どもであり、偏見を超えて互いを理解しようとする友愛の精神の中で育ち、その価値を実践してきた。

両親は2000年代初めに中国・上海で出会った。当時、韓国では中国を1960年代の韓国レベルのインフラしか持たない発展途上国と見なし、逆に中国では韓国人を「アメリカの忠実な犬」として軽蔑する風潮があった。

そのような偏見の中、父は周囲の反対を押し切って中国語を学ぶため自ら中国へ渡った。固定観念にとらわれず、自らの経験を通して中国を理解したいと考えたからだ。

彼はそこで親切で勤勉な多くの人々に出会い、「中国人は無学で不親切だ」という偏見が誤りであることを実感した。

その中で父は母と出会い、恋に落ちた。しかし母の周囲は相手が韓国人だというだけで交際に反対した。母は「背景は違っても本質は同じだ」と説得し、国籍や文化の違いだけで人を拒むべきではないという信念のもと、徐々に父を家族として受け入れさせた。

こうして友愛の精神のもと、私は2003年に生まれた。

私は中国で幼少期を過ごし、現在は韓国に住んでいる。私の目から見ると、現在SNSなどを通して見られる両国間の対立は、むしろ過去より深刻に感じられる。

互いに理解しようとせず、憎しみや嘲笑があふれている。中国では韓国人を侮辱する「バンズ」、韓国では中国人を侮辱する「チャンケ」という言葉が平然と使われており、尊重よりも軽蔑や嘲弄が目立つ。

私はこの現象の根本には、友愛の欠如があると信じている。人々は長年の偏見にとらわれ、他者を理解しようとしている。そのため私は彼らを憎むのではなく、むしろ哀れに思う。

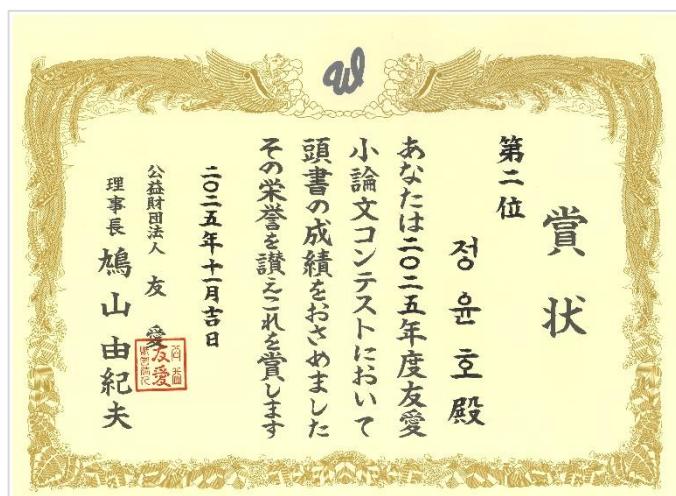
友愛は生まれながらにして備わっているものではない。誰かがその姿を示し、分かち合い、実践することで初めて広がっていく。それは理念でありながら、まるで良い風邪のように広がる力を持つ。

友愛に触れたことのない人々は、それを知る機会さえなかったのかもしれない。だからこそ、各社会の若者に友愛の価値を伝えようとする友愛財団の活動を、私は心から支持したい。

偏見を捨て、理解を求めるとき、対立や衝突は減り、国同士の協力や平和的な対話もより活発になるはずだ。

結局、友愛とは「他者を理解しようとする意志」から始まる。違いを拒むのではなく、ありのままを受け入れ、尊重すること。それこそがより良い社会と世界を築く第一歩だと私は信じている。

そしていつか、私自身の生き方や行動が、誰かにとっての友愛の種となることを願っている。



共感と尊重から始まる未来

조한이 Hani Jo

今回の交流と討論会を通じて、私は「友愛」という言葉が、単に親しい関係や優しさを意味するのではなく、もっと深くて本質的な意味を持っていることに気づかされた。国籍、言語、文化、さらには歴史的な認識まで異なる人々が一つの場に集まり、対話を重ねる中で互いの違いを理解し、共通点を探しながら関係を築いていく、その一連の過程そのものが「友愛」の実践だと感じた。

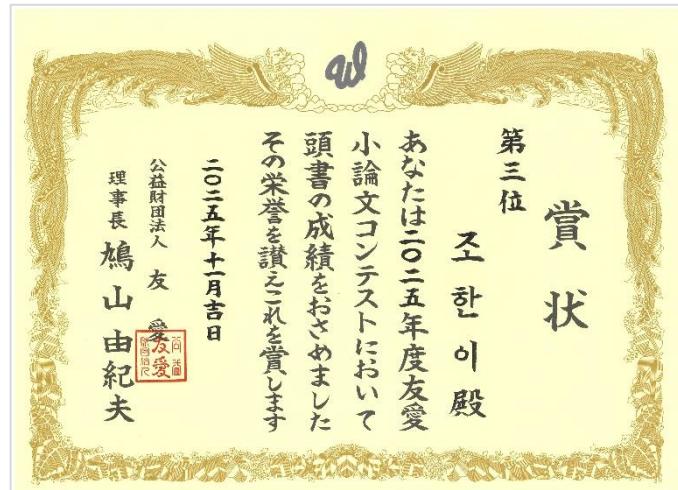
特に印象的だったのは、鳩山由紀夫元首相との対話と、その場に参加した日韓両国の学生たちとの自由な議論である。彼の語った「東アジア共同体」へのビジョンは、国家や歴史の壁を越えて、共生と協力を模索する姿勢そのものであり、その理想に触れたことで、私は「友愛」の可能性をより現実的なものとして受け取ることができた。討論の中では意見の食い違いもあったが、それを恐れずに耳を傾け、丁寧に言葉を交わすことで、私たちは互いに新たな視点を得ることができた。

私は、「友愛」とは相手を説得したり論破するためのものではなく、異なる立場を持つ他者とともに、より良い社会や未来を築こうとする姿勢そのものだと思う。そのためには、自分の意見を主張するだけでなく、他者の声にも誠実に向き合い、共感し、理解しようと努めることが不可欠である。また、それは決して一度きりの関係で終わるものではなく、継続的な対話と信頼の積み重ねによって深まっていくものである。

今回の経験を通して、「共同体」という言葉にも新たな意味が生まれたように感じている。共同体とは、単に同じ国や文化を共有しているというだけではなく、お互いの違いを認め合い、それでも共に歩もうとする意志を持った人々のつながりであると理解するようになった。

私にとっての友愛とは、自分とは異なる存在に対して心を開き、その違いを否定せずに受け入れ、そこから学ぼうとする態度である。そしてそれは、共に未来を築こうとする連帯の約束であり、私たちがこの複雑

な時代と共に生き抜くために欠かすことのできない、人間らしさに根ざした大切な価値であると強く信じている。



<私にとって友愛とは>

グラナダ珠絵ル Granada Jewel

「友愛」と聞くと、多くの人は直感的に「友人を愛すること」と捉えるかもしれない。しかし、私にとって友愛とは、「違いを超えて、相手の存在そのものを尊重する姿勢」である。それは、私自身が異なる文化的背景の狭間で生きてきたからこそ実感している価値観である。

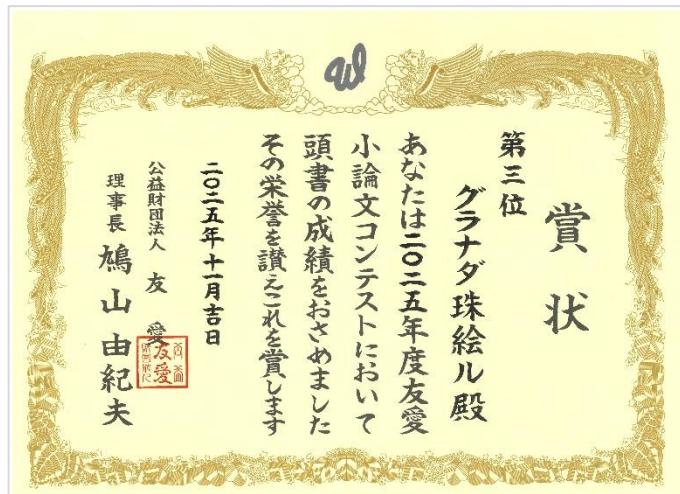
私は日本で生まれ育ち、中学生の頃から韓国に留学し、現地の学校に通ってきた。もちろん、文化の違いによる戸惑いや葛藤が全くなかったわけではないが、幼い頃に渡韓したこと、比較的早く言葉や生活習慣に適応することができた。しかし、両国を行き来する中で、次第に小さな違和感や居心地の悪さを覚えるようになった。それは単なる個人的な戸惑いではなく、文化的背景に起因する深い感覚だった。例えば、両国の人々が互いの国を非難するような発言に触れたときである。

私は日本人でありながら韓国で育ち、どちらの国や人々にも強い愛着を持っている。だからこそ、いずれか一方を否定されると、自分の存在そのものが否定されたように感じる。こうした体験は、私に「自分は完全にどちらにも属していない」という孤独感や、アイデンティティの揺らぎをもたらした。一方で、こうした葛藤こそが、私にとって両国の社会や文化を相対的に、そして客観的に捉え、尊重する力を育ててくれた。このような経験の積み重ねを通じて、私が自分自身の考え方や態度を的確に表現できると感じた言葉が、まさに「友愛」であった。

先日参加した日韓青年交流の討論会のテーマは、日韓の共通課題である「少子化」だった。主な原因として競争社会、晩婚化・高齢出産、高額な教育費や保育インフラの不足などが両国に共通する問題点としてあげられた。そして、最終的には「社会が理想の生き方を一つに固定してしまっている」ことが、若者たちにとって結婚や出産を「義務」としてではなく「負担」として受け止めさせてしまっている根本的な原因ではないかという結論に至った。議論の末にたどり着いた一つのキーワードが

「友愛」だった。誰もが自分の人生の目標を自由に設定し、それが他者と違っていても否定されずに受け入れられる社会こそが、少子化を含め、現代社会が直面している多くの問題を解決するための出発点なのではないかと思った。違いに注目するのではなく、尊重する。異なる選択を「間違い」と断じるのではなく、「別の可能性」として受け止める。そのような社会の基盤を支える概念が「友愛」だと私は確信している。

私自身、どちらの国にも完全には属していないという境界的な立場にいるからこそ、偏見や先入観を乗り越える難しさと、それを乗り越えた先にある豊かさの両方を実感してきた。そして今回の討論会は、私の中で育まれた「友愛」という視点に、もう一つの具体的な可能性を与えてくれる機会となった。友愛とは文化や価値観の違いを「壁」としてではなく「窓」として捉える力であり、その視点を広く社会に共有することが、これから時代に求められているのではないかと感じる。



私にとって友愛とは…

点と点、その間をつなぐ糸となって

박선우 Seonwoo Park

「地獄とは他人である。」という言葉で有名なジャン=ポール・サルトルの『出口なし』は、他人が地獄であることを痛感しつつも、結局は他人から離れられない人間の現実を直視させます。このように、人は群衆の中で孤独を感じることがあっても、完全に一人でいることはできない社会的存在です。しかし同時に、人ととの縁は、地獄や孤独という泥沼から抜け出し、より高く羽ばたく力を持っていることも確かです。他人の物差しで自分を測り続ける枷から解放してくれる、緩やかで強いつながり——私はこれを友愛と感覚しています。

縁によって成り立つ社会は、人と人を結ぶ糸で織りなされた一つの網であり、まさに多様なつながりが織り重なった社会的ネットワークと言えます。糸が張り詰めすぎると、つながりは葛藤や緊張の修羅場となり、衝撃が訪れたときに簡単に破綻してしまいます。関係が崩れ、お互いを傷つけ脅かすものへと変わってしまうのです。相手への心遣いや尊重なく、他者の自由を制限する高圧的な関係や、自分の自由を委ねる依存的な関係は、つながり、そしてそのネットワークの緊張を高め、荒廃した地獄へと導くだけです。人間も社会も国家も、密接な縁を結ぶほど深い傷を残す可能性があるため、関係の高まった緊張感を和らげることが大切です。

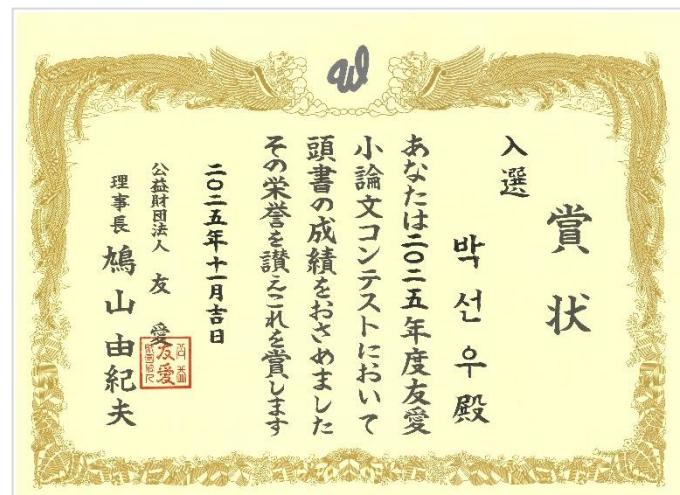
しかし、どちらか一方が引かなければ、つながりは続きません。だからこそ、私たちは健康な自立と相互尊重を土台に、共生と共存を実現するゆるやかなつながりを追求すべきだと考えます。余裕のあるつながりは互いに尊重し気配りをするため、柔軟でありながら強さを持っています。柔よく剛を制すように、衝撃が加わっても相互信頼を基盤にしなやかに危機を乗り越えることこそが真の強さです。無関心や非難ではなく

く、ささやかで温かな関心が日常を優しく包み込みます。この温もりが積み重なり、理解と尊重の好循環が日常に浸透することで、つながりの力を実感できるのです。

さらに、ゆるやかなつながりは関係の負担を軽減し、多様な接点を生み出します。さまざまな縁は、今日私たちが直面する複雑で高度な問題を解決する鍵にもなり得ます。特に国際関係は時空間的な制約が多いため、互いを強く縛る規律よりも、旅行や留学など日常の交流から芽生える相互理解がやがて相互信頼を生み出します。

例えば、交換留学や早稲田大学との合同社会科学セミナー、そして今回の友愛財団主催の日韓学生討論会を通じて、何度も日本の友人たちと交流する中で、共通の社会課題に共感し、問題意識を分かち合うことができました。こうした経験が、日韓両国の理解を穏やかに広げ、そのつながりは未来へと静かに受け継がれていくと感じています。

このように、私にとって友愛とは、ぽつんと離れた点と点を色とりどりの糸でつなぐ存在であり、その多彩な糸が一つに織りなされて調和のとれた作品を生み出す源でもあります。色とりどりの糸が、尊重と信頼を糧に編み上げ、違うからこそ、たどり着ける美しい模様は、友愛があってこそ実現する理想の姿だと感じ取っています。



友愛：私を通して君を、君を通して私を

김규한 Gyuhan Kim

すべての物体はそれぞれ固有の振動数を持ち、固有の振動数では小さな力が作用しても大きな響きを起こすことができます。このような現象を「共鳴」といいます。固有の振動数での共鳴現象は、共鳴ではない状況と質的に異なります。鉄の塊を木の枝で叩くと騒音が発生するだけですが、美しい種は共鳴現象を通じて私たちに深い響きを与えます。同様に、人々も彼らの間の共通点を理解することで、単純な交流以上の響きを作り出すことができます。私とあなたの疎通を通じて共通点を探し出し、これを通じてお互いを理解し、ひいては自分をより深く理解することができるのです。

友愛財団韓日大学生討論会は、お互いがお互いをありのままに見つめることができるように助ける共鳴の過程でした。実は討論会の初めには、言語も違うし文化も違う日本学生たちとどんな話をすればいいのか心配から先に立ちました。韓国と日本の大学生たちはお互いをよく理解できないだろうと思ったからです。しかし、むしろ些細なテーマを分かち合いながら友愛を感じることができました。私と話を交わした「人」もやはり私のようにおでんが好きで、旅行してみたい韓国の名所が多く、未来にどんな職業を持つべきか悩んでいるということを次第に悟りました。

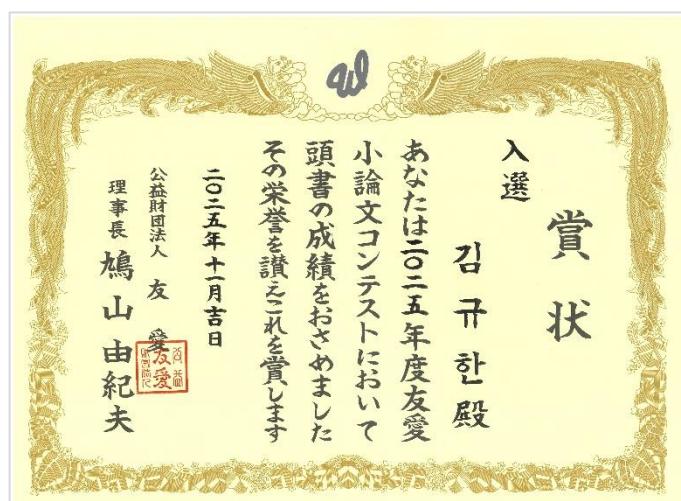
私たちはささいな話を交わしましたが、お互いを理解し、ひいては自分自身についても考えてみる機会を持ちました。コミュニケーションの過程で、私は思わず自分が「日本学生」という枠を作り出し、前にいる「人」を歪曲していることを知りました。しかし、彼をありのままに眺めてこそ、眞の疎通が可能だということに気づいた。加えて、私の考えを話す過程を通じて私を省察できる機会にもなりました。私にとって重要なことがなぜ重要なのかを説明する過程で、私の価値観を振り返ることができたのです。お互いが各自の共通点を認識し理解し「共鳴」が起

きたのです。

このように友愛とは、共通点を通じて結合する共鳴の過程を通じて達成できるものです。

低出生という共通問題についての討論の過程で、私たちはまずお互いの国についての話を思慮深く聞きました。傾聴の過程で共感を通じて暖かい慰めを受けることができただけでなく、互いの国からヒントを得たりもしました。競争よりは協力を通じて問題の解決策を模索し、お互いの国を理解してみる時間を持ちました。

友愛は共通点を見出す些細なことから始まるが、お互いの心に深い響きを残した。コミュニケーションの最大の障害物である恐怖を克服し、対話を通じて出てきてあなたを理解する時間を持ちました。お互いを「私たち」として結ぶ友愛、すなわち共鳴の価値に気づき実現する瞬間を皆が経験できることを願います。



私にとって友愛とは

박현수 Hyunsoo Park

2024年時点での韓国の合計特殊出生率（TFR）は0.75人、日本は1.15人であり、両国とも深刻な少子化問題に直面しています。少子化はもはや社会現象を超え、国家全体に及ぶ構造的な危機となっています。韓日両国では、出産奨励金の支給や若者向け住宅の支援、男性の育児休暇の推進など、出産後の子育て支援に力を注いできました。しかし、これらの政策が実施されているにもかかわらず、少子化は依然として改善されていません。したがって、真の少子化対策には、「育児」への支援ではなく、「出産」そのものへの動機付けが必要なのです。

現代の人々が出産をためらう根本的な理由は、「愛し方を知らないこと」にあると思います。愛着スタイルの連鎖によって、「愛されたことがある人だけが、他者を愛することができる」と言われます。保育ではなく養育、一人の人間を育てるという行為は、他者の自由のために自分の自由を差し出すこともあります。しかし、愛の経験や信頼の記憶が乏しい社会では、他者を守りたいという欲求はなかなか育ちません。愛着は生存に関わる欲求であるため、深い絆の中で幸福を経験した人が増えていけば、自然と少子化は緩和されるでしょう。よって、少子化を克服するためには、社会全体で「友愛」の感覚を取り戻すことが不可欠です。

友愛とは、感情に構造を与えるようなものです。つまり、刹那的な感情のやりとりを超えて、お互いの人生をしっかりと支え合う関係性を築くことです。相互理解、相互扶助、そしてその過程における個性の尊重の中で、私たちは「共に生きても大丈夫だ」という確信を得るのです。そしてその確信は、孤独の中にいる私たちが互いを支え合う手となるでしょう。鳩山元首相が討論会で示された日本の帝国主義への謝罪は、非常に大きな勇気であり、韓日両国の信頼関係の新たな扉を開く象徴でした。今回の韓日大学生交流を通じて、言葉を超えた人間的な友愛を感じ

ることができました。言葉では表せない共存と連帯の感覚が、「私たちは共に在るのだ」と気づかせてくれました。まさにそのような瞬間の中で、友愛は今もなお芽生え続けているのです。

私にとって友愛とは

천유진 Yujin Cheon

昨年9月、留学生として日本に到着したとき、私は途方に暮れた。韓国で日本語を一生懸命勉強してきたが、時々、うまく理解できないことがあった。日本人のように日本語が上手でなければ、日本人の友達はできないと思い込んでいた。そんな私に先に近づいてくれた日本の友達がいる。授業を受けていたとき、隣の学生が何かを尋ねてきた。聞き取れなかった私は、「外国人なので、紙に書いていただけますか?」と伝えた。そのとき、辞書を引きながら丁寧にやりとりした筆談を、今でもはっきりと覚えている。

こうして私たちはすぐに友達になった。その友達は、私のつたない日本語を理解してくれた。いや、私が言いたいことをすでに知っているようだった。実は、私も同じだった。言葉がうまく通じない瞬間には、友達の表情を注意深く見た。すると、なんとなく話の意味が伝わってきた。私たちは熱心に笑い、時には真剣な話をゆっくりと交わした。言葉を探して沈黙しているときさえ、私たちは通じ合っているように感じた。初めて日本に着いた時は期待すらできなかつた幸せな瞬間だった。

韓国に帰ってきた私は、このような友愛の喜びをもう二度と分かち合うことはないと信じていた。ところが、予想外に今回の友愛財団討論会で国境を越える友愛の力を再び実感した。討論のテーマは、出生率の低下と向き合った日韓青年の課題だった。出生率の低下は、私たちの未来が少しづつ薄していくようにも感じられた。韓国国内のことを考え

るだけでも難しい問題であるだけに、簡単に意見を出すことはできなかった。

それで私たちは自分たちの考えを自由に付箋に書いて、一つずつ大きな紙に貼ることにした。ぎこちない瞬間もすぐに消え、私たちはすぐに打ち解けた。韓国と日本が似たような状況だと知っていたが、一緒より良い未来を考えられるとは思ってもみなかつた。付箋が次々と貼られていく中で、沈黙の時間も自然と消えていた。私たちは韓国語・日本語・英語を交えながらお互いを理解しようと討論を重ね、最後には付箋でぎっしり埋まった大きな紙を持って発表した。発表も、そして私たちの友愛も、大成功だった。

私はもう言語と言語が行き交う瞬間にまれる友愛の力を信じる。筆談をぽつりぽつりと重ねた瞬間、どもりながら対話を続けた瞬間、そして付箋を貼ることで対話が進んだ瞬間、全てが繋がっていると思う。友愛財団のお陰で、韓国でも友愛の力を信じることができるようになった。友愛は共に未来を描いていく力もあるのだと実感している。もしかすると、言葉がうまく通じない瞬間、むしろお互いに通じるものができるのではないか。私はこれからも、どこにいても友愛の力を信じて生きていきたい。

友愛とは？存在に対する敬意。

유하재 Hajae Yu

最近、全世界的に戦争が勃発し、葛藤が深化していく様相を見せていく。現在、ロシア、ウクライナ戦争、最近起きたイスラエル、イラン事態などを見れば、自国の利益のために戦争を起こすことが珍しくなくなっている。数年前までは戦争の危険性をすべて認識していたため、交渉が成立しなくとも最大限対話で解決しようとする動きがあった。しか

し、最近、一つの国家内で、あるいは国家間の武力闘争まで続いている。また別の世界の火薬庫、東アジアも中国、ロシア、北朝鮮の同盟と米国、台湾、韓国、日本が接しているため、その危険度が他の地域に比べて全く低くない。私はこのような国際的な話題を抱えて悩んでいるうちに、友愛財団の行事に参加することになった。

鳩山前首相の話を聞きながら、最初に友愛という概念が現実に適用するにはあまりにも理想的だという気がした。だが、友愛財団で活動する人員たちを見ながら、果たして私はどんな行動をしているのか自らに尋ねた。国家間の平和を追求することは理想的であるため、不可能だという理由を挙げて行動をしない自分自身を正当化していたのかもしれない。他国でボランティアをしたり、友愛の価値を広めようとする姿は私に刺激となった。

ハイデッガーは、私たちが存在者に囲まれているため、存在に直面することができないと言う。技術社会、現代社会において、我々は目的論的思考に基づき、何でもそれを手段化して自分の利益を取ることに汲々としている。その結果、私たちは私たちに大切なものを失い、その自覚さえできない。私たちは存在そのものを忘れてしまった。私のそばで生きている木、尻尾を振りながら歩く子犬、私のそばで生きている隣人たちまでも。

私は「友愛」とは、セミナー当時に対話を交わした少子高齢化、不動産など多様な領域で問題を共に解決していくための前提だと言いたい。その日初めて会った韓国、日本人々がお互いについてよく知らないのに、各国の懸案について比較しながら討議する過程がどのように起きたのか？お互いに対する配慮があるからだ。その配慮はまさに、驚異ではないかと思う。私のそばに存在することに感謝し感嘆する、最も基本的な礼儀が友愛だと思う。

「愛」の意味がもっと近いのではないかと悩んでみたが、全く知らない人を愛することはあまりにも非現実的だ。そして広い意味の愛に含まれることはできるが、意味をまとめて表わすことはできないので適

切ではないと思った。むしろ愛ではないから、お互いを尊重し、理解しようと努力し、認めるしかないのではないか？この友愛が拡大すれば、ある瞬間、各個人同士、各共同体同士、さらには各国同士の対話と妥協を通じて相互発展をする瞬間が来るのではないか？そしてその瞬間の到来は、個人の努力から始まるだろう。そのため、微弱でも私から始めてみようと思う。

「私にとっての友愛とは」

송유나 Yuna Song

数か月前、私は延世大学のリーダーシップセンターと日本の友愛財団が共催した討論会に参加する機会を得ました。会場に入った瞬間、参加者たちの真剣な表情と堂々とした態度に圧倒され、自分は準備が足りなかったと恥ずかしさを感じました。

しかし、鳩山由紀夫元首相のスピーチが始まると、状況は一変しました。「友愛」という言葉に込められた想い、その背景と意味が語られる中で、私は胸が熱くなりました。言語の壁を越えて、彼の言葉から伝わる誠意と、政治の場でこの理念を根付かせようとする努力に、心を打たれました。

韓国人として、私たちは幼い頃から、植民地支配の歴史とその苦しみ、そして相手国政府の否定的な態度について教えられてきました。その影響は深く、今も私たちの心に残っています。しかし、鳩山氏が歴史と向き合い、批判を恐れず謝罪する姿に、私は涙を堪えることができませんでした。彼の言葉は、外交的なものではなく、心からの謝罪であると伝わってきました。

また、戦争で引き裂かれた家族について語られたことにも強く共感しました。私の家族も、戦争によって曾祖父を失い、祖母は父親を知らずに

育ちました。身近な人は皆当然のように受け止め、語られることのない悲しみでしたが、その痛みを他国の方が共に感じ、謝罪し、未来を語つてくださったことに、深く感動しました。

討論の後、友愛財団の若者たちが語った「友愛」の定義も心に残っています。「友情以上の関係、立場や信念を超えた相互理解、人々の幸福を願う心」??その言葉に共感し、自分にとっての「友愛」とは何かを考えるきっかけになりました。

私はこれまで多くの国で生活し、ヨーロッパでは率直な文化の中で成長しました。

厳しい言葉に傷つくこともありましたが、そこに誠実な思いと愛があることを学びました。一方で、韓国では遠回しな表現に戸惑いを覚えることもありました。そんな中、本当に大切な人たちは常に私に正直でいてくれました。誤りがあれば謝罪し、必要な助言をくれるその誠実さこそが、私にとっての「友愛」です。

だからこそ、鳩山氏の率直な言葉に深く共鳴しました。「友愛」は、正直さと責任を持って過去と向き合い、未来への信頼を築くことだと、私は心から感じました。

私にとって友愛とは

佐藤智夏 Chinatsu Sato

私にとって友愛とは

今回日本と韓国双方が抱える社会問題の一つである少子化について日本から来られた友愛の方、私を含めた韓国に留学している日本人、日本にルーツを持つ韓国人の5名で話し合った。少子化問題を考えるにあたって現在韓国で問題視されている様々な社会問題について話し合ってみたが、それらは決して韓国だけの問題ではなく日本や東アジア全体に

共通している問題だということが分かった。なぜ少子化が起こっているのかを韓国を例に挙げて考えたときに競争社会、学歴社会、男女間の分極化、首都圏の一極集中などの要因が挙げられる。良いとされる企業あるいは職を手に入れるためにはレベルの高い大学を卒業することが求められ、良い大学に入るためには幼いころからの教育環境が重要になる。韓国ではレベルの高い大学、企業はほとんどソウルにありこれらに入るためには、本人の努力のみならずどこで生まれ育つか、どれだけ教育費をかけられるかが未来に大きな影響を与えていているのである。だからこそみながソウルを目指し首都圏に人口が集中し、地価が上昇、一人で生きていくので精一杯になり結婚、出産がより難しくなるといった少子化は決して独立した問題ではなく様々な要因が複雑に絡み合って発生していることが分かった。もちろん良いとされる企業、大学に入ることは人生における幸せの一つと考えられるが、果たしてそれだけが幸せの指標なのだろうか？東アジア全体的に序列を重視する文化（ピラミッド構造）はかつてから存在し自分がどの立ち位置にいるのかを気にするような傾向があったと考える。しかし短期間の著しい経済発展によって現代版の序列（ピラミッド）が新しく急速に形成されたことによって、みなが同じ頂点を幸せとしその指標をめざすようになった。またSNSの発達により、序列の中の自分の立ち位置が明確に可視化され、今までではスルーされていた社会問題が他人との比較であらわになり、それもまた不満を蓄積させる要因となった。この討論の内容に従って考えると、現代版のピラミッドの頂点を皆が目指す過程でこれらの社会問題が発生しているため、幸せの形は一つではないと皆が思えるようになること、またそれが自分の幸せの形を持ち友愛という理念に基づいて互いに尊重できるような社会を目指すことが重要だと考える。結論として友愛の理念は互いの多様性を認めあい、それが現代における社会問題を緩和させることにつながるのではないかと感じた。

友愛に根ざした若者のリーダーシップが切り拓く、 東アジア協力の新たな道

임건태 Geontae Im

クーデンホーフ＝カレルギーが 1923 年に著した『全体主義国家対人間』において提唱された友愛は、自由と平等の均衡を追求する戦闘的な理念である。彼は「友愛なき自由は無政府状態を、友愛なき平等は專制を招く」と警告し、人間疎外を克服する倫理として友愛を強調した。この思想は 1953 年に鳩山一郎によって『自由と人生』として翻訳され、日本の政治哲学の基礎となった。彼は「相互尊重・相互理解・相互扶助」という三原則を掲げ、資本主義と社会主義の二項対立を超えて、自律と共生の調和を提唱した。この理念は東洋的思考である「修身齊家治国平天下」とも深く結びついている。

鳩山由紀夫元首相は、この哲学をもとに 2009 年、「東アジア共同体」構想を打ち出し、日中韓の歴史問題を超えた未来志向の協力を強調した。彼は最近のインタビューにおいて、友愛を「人類普遍の価値の実現過程」と定義し、EU 統合の経験を東アジアに応用するビジョンを示している。

今回の「延世大学リーダーシップセンター×日本友愛財団日韓大学生討論会」は、このような友愛の理念を実際に体験する機会となった。日韓両国の学生が共通の社会問題について議論し、異なる背景を理解しながら関係を築いていく過程は、友愛三原則の内面化を可能にした。この経験は、単なる文化交流にとどまらず、未来の東アジアの若者たちが歴史的和解と地球規模の課題に対応する実践的な協力ネットワークを構築する可能性を示している。友愛はもはや理想的な理念にとどまらず、デジタル時代のつながりと結びつくことで、人新世の課題に応える普遍的な価値体系として再生されつつある。

友愛と架け橋

서주훈 Joohoon Seo

人間は社会的動物であり、人々との交流が必要です。「You and I」相手の話を聞き自分の話をしなければなりません。ここで重要なのは相手の目線で理解して見ることです。自分の目線で相手を見ると、誤解と偏見が生じるので直接会話することが重要になります。二人の友人の間に橋を作り対話することがまさに「友愛」の始まりです。

私はその橋を行き來した者です。日本の福岡で生まれ、小学校入学前に渡韓しました。最初は日本語を話す異邦人を良く見れず仲間外れにもされました。橋を渡るときに誤解と偏見があったのです。韓国語を勉強して会話が出来るようになると、同団の人達も変って心を開いて近づいて来てくれました。そんな姿を見て、誤解と偏見を無くそうと思いました。

去年、名古屋の某高校の韓国修学旅行の1日ガイドをしました。午後にホテルで少子高齢化と日韓関係をテーマに討論しました。日本の学生達は、共通テストのような修学能力試験で人生を決めるとニュースで見たり、ドラマ「SKY キャッスル」のような私教育ブームで韓国が深刻な競争社会なのかと質問してきました。私は修学能力試験以外にも日本の推薦やAOのように随時選考があり、SKY キャッスルは上流階級の話だと回答しました。

高校生達との討論が疑問を解決する事だったとすれば、今回のグループディスカッションは日韓両国の学生が橋の上で会話する事でした。日本語グループでの討論参加者達は、私を除いて全員日本国籍で友愛財団の学生、留学生、交換学生等多様な学生達でした。人口減少社会に直面する日韓の若者達が抱く課題について、私達は東アジア儒教の影響で序列重視文化を原因に挙げました。短期間の経済成長でピラミッド式序列化が進み、SNS の発達で社会的地位の表面化と競争心理が発動し、経済

的負担で育児と出産が難しい環境が造成されたという結論に至りました。

対話中、私と留学生はお互いに考えが違いました。留学生は性犯罪による女性の人権問題、私は首都圏の一極集中化を原因として提示しました。それぞれ考え方は違いますが、日韓両国は似ている点が多くかったです。東京港区はソウル江南と似ていて、東京とソウルは人口集中するという類似点があり、日本と韓国は問題の本質が同じでした。最終発表で、一つではなく多様な夢見る社会を作ることを課題にしました。

グループディスカッションを通じ、対話の重要性を知りました。日本と韓国の中にはメディアが作った数多くの誤解と偏見があり、お互いを理解するためには共に橋を作つて対話しなければなりません。私は様々な日本の学生と会話しながら友愛の意味を悟りました。「You and I」あなたと私が会つて話せば、初めて「We」私達になります。私は友愛の精神を振り返り、これから日韓関係でお互いを繋ぐ「架け橋」の役割を果たしたいと思います。

友愛財団小論文コンテスト

김윤구 Yoongu Kim

人類史を振り返つてみると、社会の規模は何でア(我)と非我を区分するかによって次第に拡張されたと見ることができる。血縁で氏族を成し、信仰で部族と古代国家を成し、民族で近代国家(国民国家)を成し、理念で汎国家的連合を成した。そして、このようなアワビアに対する二分法の中で友愛(友愛)と排撃(排撃)が発生する。

ここで排撃について知っておくべき点は、異質な集団を同質的な集団として再定義するために、積極的な排除を正当化するためのメカニズムを作るということだ。カトリックのトリエント公会議がそうであり、帝国主義列強の優生学がそうであり、米国のトルーマン・ドクトリンがそうだった。

友愛の概念は、こうした排撃に対応する概念として捉えられるべきである。すなわち、友愛とは既存の異質な集団がなぜ同質的な集団になりうるのかを正当化する一連の努力なのだ。ここで「努力」と表現するのは他人を同志として包容し、短所を差として認めるなど、新しい正常性への履行は既存の正常性に対する破壊的創造を意味するため、必然的に不便さが伴うためだ。

しかし、このような不便を甘受する勇気を発揮するのは、より高い価値を追求するためだ。これまで排撃の対象と考えていた彼らもやはり私たちと同じ人類であるため、排除の対象ではなく手に手を握り共に未来を開いていく人々であることを知っているからだ。

かつて民族の概念があった東アジアは、西欧とは異なる足跡を残したため、前の例のように段階的な事例を確認することは難しい。しかし、19世紀末、東アジアはいずれも非自発的な開放の歴史を共有している。そして、このような「西欧」による衝撃に対して、国家間の連帯を主張する汎アジア主義が各国で発生した経験がある。もちろん、このような汎アジア主義は、民族主義的慣性と軍国主義的歪曲によって、一度挫折した経験があるということに残念さを禁じ得ない。

しかし、いつまでも現在のような国民国家水準にとどまり、互いを「他者」と思ってはならない。現在の東アジアは儒学と仏教を共有する同質的な文化圏の中で、インターネットのような技術の発展により互いの固有の文化も高い水準で認めて交流している。甚だしくは欧州のEUや東南アジアのASEANのような成功した国家連合の導入事例も存在する。このような事例を参考にして、旧時代的な民族主義の足かせから脱し、真の我として受け止め、友愛の対象として見なければならないだろう。

「ありのままを認めることから、私たちの友愛は始まる」

김동연 Dongyoun Kim

韓国と日本は「近くて遠い国」と言われる。距離はもちろん、情緒や文化的にも世界で最も近い国の一つかもしれない。だからこそ、歴史的に

多くの接点があったが、「日帝強占期」という痛ましい歴史を共有している。特にこの時期は、韓国にとっては国史、すなわち支配の記憶として残っているが、日本にとっては世界史、海外で起きた出来事の一部として認識されている。このような認識の違いは、韓日関係におけるリスク要因となっている。韓国は被害者の視点で、日本は過去世代の出来事として歴史を見ているからだ。

それにもかかわらず、韓日両国は韓国人専用の入国審査レーンや様々な文化交流を通じて関係改善を進めている。こうした交流は、確かに「友愛」へと向かう道だ。しかし、友愛が真に受け入れられるためには、過去を回避せず、ありのままに向き合う姿勢が必要である。誰の過ちであっても、事実をそのまま見る努力があってこそ誠意が生まれる。そうでなければ、解決されていない過去は、いずれ再び誰かによって問題提起され、議論の火種になることは避けられないだろう。

現在、強大国が自国中心の外交に舵を切る中、国際情勢はますます不安定になっている。こうした状況の中で、韓国と日本の協力はかつてないほど重要になっている。両国は、半導体、自動車、造船、安全保障、文化など、多様な分野で互いの強みを生かし、弱みを補うことができる。だからこそ、今こそ私たちは両国の友愛のために不断の努力を重ねるべきである。それが実現できれば、韓日両国はアジアのリーダーとしてだけでなく、共に世界のリーダーへと生まれ変わることができる。

私たちが見つめるべき友愛

홍윤기 Yoonki Hong

人山元首相の友愛に関する演説は非常に印象的だった。過去の日本と韓国の関係を知らない韓国人はいないだろう。人山先生の基調講演で印象的だったのは、単に日本と韓国の過去を語るのではなく、なぜ日本がいまだに嫌韓や嫌中の情緒を持っているのかについて、バブル経済と日本

の近現代政治史をもとに説明する場面だった。友愛という財団を設立するくらいだから、人山先生の親交に対する価値観がどうなのかはおおよそ予想がついたが、眞の友愛のためには、双方がまずお互いのことをよく知らなければならぬという立場を持って、他国の学校でともすれば言い訳のように聞こえるような日本社会の事情について話されるのを見て、国籍を離れて本当にお互いが心から理解することを願う心を持っているなというのを感じた。友愛という言葉を聞くと、普通は兄弟や友人同士の大切な気持ちを思い浮かべる。しかし、人山先生の言う友愛は、そのような概念からもう少し進んでいるようだった。個人と個人、集団と集団、人と環境・・・今回の講演で知り合った友愛はまさに「関係」だった。一つの個人として生まれ、生きていく中で出会う世の中と結ぶ関係。それが他人であれ、他の国であれ、重要なことはどんな対象と出会うかではなく、出会う対象にどんな態度を持つかだ。そして友愛を追求するためには、まず未来を確保しなければならない。直ちに自身の未来が保障されず不安な状態ならば、他人に向けた友愛の心も簡単に持てないこともあります。今回の友愛財団の討論のテーマだった日本と韓国の出生率問題は、友愛という価値を志向するためにも指摘しなければならない重要な議論だったと思う。未来がなければ友愛もない。そして子供は国家の未来だ。韓国と日本の交流を論じる席で出産率を扱うことは、そう考えると理にかなっている。また、日本と韓国社会は似たような様相を呈している。韓国の10年後を知りたければ日本を見ろという言葉は、近代以降の両国の歴史と発展過程、それから派生する様々な社会的現象が普通の一国だけのことではないということを示している。少子高齢化、一見関連して見えるこの二つの問題は、実は各自だけの領域を持っている。ただ、年金というシステムの下で、二つの問題が互いに変数として作用するため、一緒に扱われたりもする。世代間の友愛のためにも、少子化の問題は深く取り組まなければならない。友愛は互いに分かち合うことであり、一方的に施すことではないからだ。与えるような友愛は与える側はもちろん、受ける側にさえも良くない影響を及ぼす。いや、そもそもそれを友愛と呼ぶのもおかしい。少子化でなければ、高齢化も問題にならないと思う。高齢化のもう一つの意味は、

平均寿命の延長だからだ。しかし子供たちが生まれず、また年齢と世代を基準に作動する年金システムというものがあるため、高齢化という社会問題で名付けられたのだ。社会構造や国家に責任を転嫁する考えはない。完璧なシステムなんて存在できないからだ。ならば、今必要なことは根本的な問題を認識すること、そしてその問題の原因を把握することだ。言葉だけで叫ぶ友愛は虚しい。世代間の友愛、国家間の友愛、ひいては私でないものと私の間の友愛。そのすべてのためには未来に対する現実的な考察が必要だ。今回の講演をきっかけに、これを改めて考える時間になった。

私にとって友愛とは

조유빈 Yubin Cho

友愛は韓国語で、“兄弟のような愛情”や“親しい友情”を意味する言葉である。

日常的に「友愛」という言葉を使うときは、実際に親しく交流のある、情を深く分かち合った人との関係を表現することが多い。そう考えると、日本と韓国、国家間における友愛とは、いったい何を意味し、象徴するものなのだろうか。それは簡単には言い表せない難しさを伴う問いであり、「友愛」という言葉すら不慣れで、ぎこちなく感じられるかもしれない。

そのような意味で、日本と韓国、両国間の友愛は何を意味し、象徴するのかを悩むに値する日々だ。

私たちは今回の討論で「少子化」という現実的で共通の社会問題を議題として、共に話し合った。

日韓両国ともに出生率 1.0 以下の社会を抱え、若者世代は結婚と育児を人生の当然の選択ではなく、“前に進むための大きなリスク”として認識

している。

私もやはりそのような負担を現実的に感じたことがあるので、日本の学生たちが自分の人生を率直に共有してくれた場面は見慣れないながらも、慰めにもなった。

言葉や文化、制度の違いがあるにもかかわらず、同世代の若者として抱いている悩みは驚くほど共通していた。

さらに印象的だったのは、単なる問題提起にとどまらず、解決に向けて共に知恵を絞ろうとした点である。

育児共同体の回復、父親の養育参加の促進、柔軟な勤務環境の必要性などは、単に制度改善だけでは成し遂げられない“文化的転換”を求めるという点で深く共感した。

特に、「出産は個人の選択であると同時に社会の責任でもある」という日本人学生の言葉が私には深く響いた。

そのように、異なる環境の中で育ってきた他国の若者と真剣に意見を交わすことは、自分の考えを振り返るきっかけとなり、それが真の友愛の始まりなのだと気づかされた。

先に述べた疑問 — 日本と韓国、両国間の眞の「友愛」は存在するのか？

あるいは存在するべきなのか？ — このような疑問は私が今答えるべき役割ではないと思う。

しかし、私が日本の学生たちと交わした交流のなかで感じた「友愛」は、確かにそこにあった。

私は日本の学生たちと出会い、「友愛」を感じた。私が感じたその友愛は、貴重で大切ななものである。

もし、私が感じたその感情が私を含むもっと広い社会の構成員たちの間で共有されれば、日本と韓国間の友愛は存在できるのではないか、という小さな希望の火種を心の中に宿す。

小論文「私にとって友愛とは」2025年韓国/延世大学校





左の *u* (ユー) と右の *i* (アイ) でユーアイ (友愛) です。これは英語のユー (Y o u あなた) とアイ (I 私) に通じ、全体の形は、We (私たち) の *w* であり World (世界) の *w* です。
あなたと私、私たちで友愛の世界を目指しましょう！

公益財団法人 友 愛

[https://yuai - love.com](https://yuai-love.com)